

田川地区の県立高校再編整備計画案に係る未就学児保護者対象説明会 記録(要旨)

- 1 日 時 平成 30 年 8 月 19 日 (日) 午後 1 時から午後 3 時
- 2 場 所 出羽庄内国際村 (鶴岡市伊勢原町 8-32)
- 3 出席者 地域の方々 32 名
県教委 須貝高校改革推進室長、伊藤高校改革推進室長補佐
奥山高校改革主査、丹野高校改革主査、安達高校改革主査
- 4 内 容 須貝室長から説明後、質疑応答
- 5 質疑応答概要

(質問・意見)

田川地区の再編の必要性や計画は、概ね理解できた。しかし、中高一貫校の設置は拙速ではないか。東京の私立の中高一貫校の場合、中学の入試で相当の勉強をさせ、高校で編入してくる生徒にも高難度の試験を課して通った生徒に高いレベルの教育を施すから受験に強いのである。公立の中高一貫校は、制度上学力試験ができない。6年間の一貫した教育とかのよさは理解できるので、中高一貫校に対して反対ではないが、おそらく受験に強い学校にはならないと思う。実際いわゆる各地域の一番の進学校には中高一貫校を設置していない。この地域の一番校は鶴岡南高校であるので、その鶴岡南高校を中高一貫校にすることには問題があるのではないか。公立の進学率の高い高校はそれなりに需要があるわけだから、そこに入れたら必ず勉強を一生懸命やらせてくれて、勉強についていけばある程度の大学にいけるのだという高校を求めている。それを中高一貫校にしてしまうと、質を担保できるのかということに疑問を感じる。

(県教委)

ご指摘のとおり、公立の中高一貫校は大学受験のためにつくるのではなく、生徒の多様な個性・能力を伸ばすのが目的だ。ただし、先進的な他県の事例を見ると、公立の中高一貫校でかなりの伸びをみせる生徒がいるようだ。全員が難関大、医学部を目指すわけではないので、画一的な指導をしているのではないと思うが、進学実績は上がっている学校が多い。そういった他県の状況も、中高一貫校の評価・検証でお示ししたい。

(質問・意見)

中高一貫校の設置に賛成である。東桜学館は1つの校舎となっているが、鶴岡の場合は2つの高校の既存の校舎を使うという形なので、ソフト面として、「こういったカリキュラム」だとか、「こういった教育をしていく」といった施策が見えてこない、もろ手をあげていいとはいえない。こういうスタイルでやるから鶴岡の中高一貫校は分離型でもできそうだった学校運営のスタイルが見えてくるといい。

(県教委)

理想的には校舎は一体型の方が良い。しかし、国及び県では、公共施設は計画的に直しながら長く使っていくという長寿命化を大方針としている。鶴岡南高校と鶴岡北高校のいずれも比較的新しい校舎であり、どちらかに寄せて新校舎をつくるというのは財政的にも

理解を得られないのではないか。

校舎が離れているデメリットをどのようにして克服していくのかという点であるが、徒歩で移動可能であるが、10分の休み時間で移動するのは厳しい距離にある。合同の行事だとか、別の校舎で授業を受ける機会を計画的に設けるだとか、中高一緒の部活動だとか、中高の交流の場面を意図的にできるだけ増やす工夫が必要だと考えている。佐賀県の事例では、校舎間がキロ単位で離れているが、日常的に中高生と一緒に授業を受けることはないので、それほど支障はないとのことだった。残念な点は、分離校舎の場合、中高の先生方が一緒に職員室にはならないことである。一緒にいることで、生徒を6年後にこう育てたいというのが見えてくる。そのため、教科会、分掌の会と一緒に開くとか、ICTによる情報交換などもできるようにするといった工夫が必要になってくる。

逆にメリットもある。他県では1つの高校の敷地に中学校を足すことが多いが、その場合、教室・体育館が不足気味になるという課題を抱えている。2つの高校の校舎とグラウンドを活用できるのは、全国的にも恵まれた環境であると言える。

(質問・意見)

庄内地区に中高一貫校を新設するとして、携わる先生は全く新しい人が来るのか。既存のその土地にいる学校の教員が担当するのか。東桜学館の場合はどうなのか。

(県教委)

中高一貫校のために新たに採用するのではなく、今、高校・中学校で勤めている先生が人事異動で配置されることになる。東桜学館もそうである。優秀な先生を配置したい気持ちもわかるが、どこの学校も大事な教育をしているので、そういう差別はできない。中高一貫校に限らず、学校は組織で運営されるので、そこに来た教員が、その学校の特色や生徒を理解して、協力し合ってその学校を良くしていくものだ。中高一貫校も、目指すものを共有して、知恵を出し合って高めていくことが大切だと考える。

(質問・意見)

中高一貫校に賛成である。いくつかお聞きしたい。

- ① 高校の7クラスの募集は広き門である。鶴岡南高校は進学校であり、学力のレベルが下がるのではないか。大学進学を目指す子どもに対して対応できるのか。
- ② 中学で高校の内容を学ぶことになるが、指導できる先生がいるのか。今までにないような学習が多いようだが、先生方が対応できるのか、先生方の研修なども予定しているのか。
- ③ 校長、教頭は1人だとすれば、災害があったときなどの対応はどうなるのか。

(県教委)

- ① 確かに、全体的に中学生の数が減るのだから、トップ校も定員を減らさなければ、生徒の学力幅が広がり、平均点は下がるかもしれない。しかし、学校規模が小さくなると配置できる教員も少なくなり、今の教育水準を維持できない恐れがある。全国的に見ても、進学校は6～8学級である。鶴岡南高校は5学級でも頑張って成果を出しているが、4学級になると、そもそも全国と競う進学校ではなくなってしまう。学力に幅があっても、大きい集団で、コースや選択科目で、それぞれに合った授業ができる体制をつくっていく方が

有効である。高校入学段階でそれほどの学力ではなくても、3年間でぐんと伸びる生徒はたくさんいる。

② 中学校の免許をもっている高校の先生が中学生を教えることもできる。本県では、探究型学習を進めており、先進県に中核教員を派遣してノウハウを学ぶなど、先生方の研修にも取り組んでいる。

③ 管理職は、東桜学館の場合、校長は中高合わせて一人、教頭は中と高にそれぞれいる。新しい学校に何人配置されるかは分からないが、必要に応じて配置されることになる。

(質問・意見)

通学について、中学校はスクールバスや徒歩、自転車で通っているが、市内中心部の学校に通うとなると、旧隣町から通うイメージがわからない。東桜学館では、どのくらい遠くから通っているのか。庄内からも通っているのか。スクールバスはあるのか。

(県教委)

東桜学館では、新庄市、上山市、西川町などから通っている。さくらんぼ東根駅から近いので、JRでは通いやすい。庄内地区からの入学者はいるが、通っている生徒はいない。市立中学校等のスクールバスは、学区がそれほど広くないので、場所を限定して走らせることができる。しかし、中高一貫校の場合、通学範囲が広く、かなり広域に走らせなければならぬので、経費的にみても現実的ではない。これは、高校再編も同じである。統合することにより、近くに学校がなくなるので、遠くに通わなければならなくなる。高校生だけではなく、お年寄りなども含めた交通弱者の足の確保は、地域の交通政策の問題と捉えることもできる。市町村で福祉バスを走らせて、高校生を乗せてもらっているという市町村もある。県教委だけでは解決できない問題なので、関係する方々と話し合いながら協力をいただきながら良い方向に行けばよいと思う。

(質問・意見)

① 今日は、お盆、花火大会や夏休みの最終の時期と重なり、人が集まらない時期の開催だったので、開催日時の設定に気を配って欲しい。

② 中高一貫校ができると、入学試験の可否で進学先が変わることになり、選民意識のようなものが中学生に生じるのは良い気持ちがしない。小学6年生は自分で進路を決められないという意味では、親が進めて受検させることになる。

③ 高校から入ってくる生徒の進度差をどのようにしていくのか検討してほしい。

④ 県立中学校が増えると、他の中学校の生徒が減るので、部活動が成り立たなくなるなどの影響がでるのではないかと。

⑤ 企業誘致による役員や職員のお子さんのための学校として計画が持ち上がったと聞いた。誘致企業の役員や職員のお子さんが優先され、願書の段階で可否が決まってしまうのではないかと。中高一貫校は、公立ではなく、私立がやるべきことなのではないかと。

(県教委)

① 開催の日取りが悪かったとすれば申し訳ない。検討したが、第2回の関係者懇談会に報告するためには今日しかなかった。今後も何らかの形で説明をする場面があるかもしれない

い。今回で終わりではなく、機会があれば、ご意見を聞いていきたいと考えている。

- ② 東桜学館の場合は2.24倍と、相当加熱しているわけではないが、不合格者の方が多い状況である。目指していた学校に入れなかったショックはあるだろうが、大都市圏では、競い合いの中でもまれている。いずれ本県の子どもたちも社会に出て競い合っていかなければならない。挫折を乗り越えて、成長していくことも必要なのではないか。
- ③ 進捗差については、東桜学館の場合は、高校1年の時には、内進生と外進生は別のクラスにして、進捗調整を図ることになっている。また、前倒しで詰め込みすぎるのは逆効果だと考えており、中学校の内容をしっかりと定着させたり、深掘りさせたり、体験させたりしていくことが基本である。数学では一部先取りしている。
- ④ 県立中学校の定員を仮に80人だとすると、地区全体の約4%にあたり、25人に一人ぐらいの割合となる。過大な影響が出ないような定員を設定する必要がある。
- ⑤ 企業誘致のための中高一貫校ではない。庄内の子どもたちにとって選択肢が広がり、充実した教育環境で子育てをしたいという保護者の希望に応えることとなると考える。住みやすく、働く場があって、教育環境が充実している鶴岡に魅力を感じ、鶴岡に人が増えれば、それは良いことではないか。親の職業で、合否が決まることはないと言言できる。

(質問・意見)

山添校が廃止になってしまうのは残念だ。発達障がいの子どもの指導などが充実していると聞いている。山添校が募集停止になり、庄内総合高校に集約されていくのかと考えている。発達障がいをもつ子どもが農業高校や、水産高校にも進んでいるが、集団についていけないといった社会的スキルの低さから、退学してしまうという話も聞いている。発達障がいをもった子どもの受け入れ先をどのように考えているのか。

(県教委)

山添校は、文科省の指定の事業もあり、発達障がいのお子さんの教育のノウハウが充実しているという点で大変大きな役割を担っていると認識している。しかし、発達障がいなどのお子さんへの指導は、どこか特定の高校で行うのではなく、全ての高校で、個に応じた支援を行っていかなければならない。そのための特別支援員を配置したり、特別支援コーディネーターを定めたりするとともに、一般教員対象の特別支援教育に対する理解を深めるための校内研修を進めている。なお、庄内総合高校は、特別支援教育に特化した学校ではないが、山添校のノウハウをしっかりと引き継いで、より手厚くできるように考えていく。

(質問・意見)

義務教育のうちに社会性を身につけさせていくよう支援することが必要だが、高校でもコーディネーターという窓口ができたということで、大学進学を目指す子ども、専門の技術を身につける子ども十分に活躍できる高校を田川地区に作っていただきたい。

以上